

## 地歴・公民科 資料 No. 54

もくじ

解説	イスラーム世界をめぐる基礎用語 —その〈語り〉の基本—/鈴木 規夫 ……1
図書紹介	……………7
新教育課程用教科書執筆にあたって	—————
現代社会… 8	高校現代社会… 9
世界史A… 10	世界史B… 10
高校日本史A… 11	政治・経済… 11
論説	教育基本法を守るために/小森 陽一 ……12

### 解説

## イスラーム世界をめぐる基礎用語 —その〈語り〉の基本—

愛知大学国際コミュニケーション学部助教授

鈴木 規 夫

### はじめに

#### 20世紀末になぜイスラーム復興現象が？

イスラーム復興現象とは、世界各地における政治的言説のイスラーム化を意味しています。世界各地でそれまでナショナリズムや社会主義などのイデオロギーを掲げて行われてきた政治的動きが、冷戦後の状況においてさまざまな宗教の名の下に起こるといって、いわば宗教的言説の政治化現象のイスラーム的あらわれ、とよいかもかもしれません。

そのさまざまなイスラーム現象の一部に、原理主義という、もともとは20世紀初頭のアメリカにおけるキリスト教一部宗派を指す用語を、欧米メディアがイスラーム復興現象に当て嵌めた、いわゆるイスラーム原理主義のような動きもあれば、現在ではイスラーム過激派という表現が定着した、テロ行為それ自体が自己目的化しているかのような動きもあります。つまり、それらは全体としてのイスラーム

復興現象において、立ち現われ方の異なる一部の現象なのです。したがって、「イスラーム＝テロ」などと短絡することは、イスラームそれ自体を理解する上でも、また現代世界におけるイスラーム復興現象を探る上でも、明らかな間違いです。

イスラーム復興現象は、ナショナリズムや社会主義などの「解放の言説」がその機能を喪失していく過程に登場してきました。アラブ・ナショナリズムのパワーの衰退と政治の舞台におけるイスラーム的言説の政治化が、1967年の第三次中東戦争におけるアラブ・ナショナリズムの敗北から始まったことは明らかです。

イラン・イスラーム革命もそれに続くサダト・エジプト大統領の暗殺、シリアにおけるムスリム同胞団決起による内戦状況、クウェートをめぐる湾岸危機・戦争へのイスラーム世界の特異な反応、アルジェリアのイスラーム救国戦線（FIS）など世界各地におけるイスラーム諸勢力の台頭とそれへの弾圧後

の内戦などといった70年代から90年代にかけての一連の出来事も、この1967年に生じた、軍事力におけるイスラエルとの圧倒的非対称状況に、「想像力」で抗するためにイスラーム的言説が政治化していった過程に他なりません。

21世紀最初の大規模軍事行動であるアメリカによる攻撃を受けたタリバーン政権下アフガニスタンの政治状況ばかりでなく、旧ユーゴ、チェチェン、中央アジア、新疆ウイグル自治区などにおけるイスラームの名の下に展開される動きも、こうして世界中に広がっていた政治的イスラーム現象の一端であるといえるでしょう。

以下に、こうして世界中で政治化していくイスラームをめぐるごく基本的な事項を、基礎用語それぞれの意味の繋がりを通して簡単に整理しています。

## ムスリムとは何者か？

### アイデンティティ探しの世界の果てに邂逅するアッラー

イスラームとは「アッラーへ絶対帰依するコト」という意味です。このイスラームに「絶対帰依するヒト」、すなわちイスラーム教徒のことをムスリムと呼びます。イスラームはサラーム(平和)とも意味が繋がっています。アッ=サラーム・アライクム(あなたに平安あれ)は、ムスリムの挨拶の基本です。

そもそも「～教」というようにさまざまな信仰システムを「宗教」の名の下にまとめてしまうという方法は西欧近代の産物ですから、「イスラーム教」と呼ぶのはちょっとヘンです。またかつてよく使われていた「回教」という呼び方も、漢語の昔の用法を直輸入しただけですから、これもおかしいのです。中国でも最近では原音に近い表記をしています。つまり、さまざまな用語の意味の繋がりを考慮すれば、イスラーム教でなくイスラームとだけ呼ぶ方がしっくりきます。

新年に神社を参拝し没後は仏式でお葬式をするようなごく一般的な日本人には、この唯一絶対の神であるアッラーがなかなか分かりにくいかもしれません。実は、アラビア語を話すキリスト教徒も神のことをアッラーと呼びますし、ユダヤ教徒の神もこの同じ神です。古代ギリシアのポリス社会が崩壊した後のヘレニズム的環境がこうした一神教をうみだしたのだともいわれています。

そこで、ムスリムの人たちがどんなところにユダヤ教徒やキリスト教徒との違いを見出しているのか

についても考慮しておく必要があります。

例えば、キリスト教徒は自分たちのことを最初からキリスト教徒と呼んでいたわけではありませんでした。ローマ帝国下の人々が「キリストにくっついていくヘンな人たち」というやや皮肉な意味を込めて呼んだ「他称」がキリスト教徒の元々の意味だったそうです。初期のキリスト教はユダヤ教の一分派であったといった説もあります。これはかなり有力な説のようで、実際にキリスト教の教義体系の中にさまざまな独自の生活規範が希薄であることが、それを立証しています。

他方、このアッラーに絶対帰依する人たちは、自分のことをはじめから自称でムスリムと呼んでいます。キリスト教徒とは異なって、独自の生活規範もその教義体系に組み込まれています。これはそれぞれの違いを考えていく上で、結構大切なポイントであると私は考えています。

イスラームの復興という、ここ30年あまりの世界的现象の前提には、ナショナル・アイデンティティではどうしようもなくなった荒廃した世界というものがあります。現代において、差別や紛争の絶えないところに生活する人々が、自分は一体何者かと考えたときに、「唯一絶対のアッラーに従うムスリムである」という自覚をもつことで、辛うじて、そしてこれまでよりもよりよく生き延びていくことができる……。さらにその信仰システムに現実的な生活規範も組み込まれているのなら、「揺りかごから墓場まで」面倒を見てくれる近代国家の幻想に浸ることなく、人々がそうした信仰システムに依拠して生きていこうとするのは道理です。

あるアラブ・ムスリムの友人は、たんなるアラブ人は獣にすぎない、アラブ人のムスリムやクリスティアンなどの信仰をもってようやく人間になれる、とよく言っていました。

預言者であり使徒であるムハンマドは、「あらゆるムスリムはたがいに兄弟姉妹である。ムスリムはすべて兄弟姉妹の絆で結ばれている」と言い残しています。この信仰による信徒の平等な絆の形成を明示するイスラームは、人間社会の歴史においても革命的なものであるともいえます。その教えに従う人々が現代では地球上に約12億人も存在するわけです。

## 「六信」 何を信じればムスリムなのか？

ムスリムとはイスラームに帰依する人たちの自称ですが、そのムスリムはいったい何を信じているのでしょうか？

基本的に信じなければならないのは、とてもシンプルで、六つあります。これを「六信」といい、イスラームの信仰の基となります。

まず、何をさておき第一に、宇宙の主にして創造者である唯一神アッラーです。ムスリムは無神論や多神論とは一切関わりがなく、完全に純粋な一神論を信じます。アッラーはあらゆることをなすうる能力をもちながら、一者であり、その主要な特質を指し示すための99の最も美しい名をもっています。なぜ、一者なのに99の名を持つのかというのは興味深い問題で、そういったアッラーの唯一性をタウヒードといいます。

第二に、**天使たち**です。アッラーは不可視であらゆる肉体的知覚を超えた存在ですから、アッラーと人間との間には何らかのメディア・媒体が必要です。ムハンマドにアッラーのメッセージを媒介したのは**天使ジブラーイー**ル（ガブリエル）です。興味深いのは、天使よりも人間の方がアッラーにより近いとされていることです。アッラーは人間の祖であるアダムに、天使たちには教えることのなかった〈もの名〉を教えました。そうした扱いに、冗談じゃない！とって反抗してしまった天使が、**イブリース**（悪魔）になったのだとも言われています。

第三に、**天啓の書**です。ムハンマドが受けたクルアーンはもちろん、アブラハムの経典、モーゼの律法書、ダビデの詩篇、イエスの福音書なども、アッラーがもともと啓示したものだということになっていて、信仰の対象なのです。

また、この天啓の書は天上界に存在する書を天使ジブラーイー

ルが預言者ムハンマドに読んで聞かせたわけで、オリジナルはあくまで天上界にあることになっています。つまり、地上のクルアーン

のテキストはコピーだということになります。この神学上の巧みさが、近代キリスト教オリエンタリズムのような「オリジナルな聖書発掘」への偏執狂に陥ることからイスラームを救っているといえます。

第四に、**預言者たち**です。ある天使たちはある特定の人間にアッラーのコトバを伝え、それをその選

ばれた人間が他の地上界の人々に伝えるわけですが、クルアーンでは、この選ばれた人間のことを、預言者、使徒、御使い、告示者、警告者などさまざまな名で呼んでいます。また、文盲であったムハンマドを預言者にして使徒であるとしたのは、アッラーの御業を人々によりはっきり示すためでもあったといえます。

第五に、**来世**です。預言者ムハンマドは、やがて最後の審判の日がやってきて人間はすべてその肉体の死後に蘇り、アッラーが人間の現世でなした所業のうち善行には報奨を与え、悪業を罰するのだといえます。

その際、アッラーは一人ひとりの詳細な評価シートを持っていて、善き人は楽園に行けるわけです。むろん悪には地獄で、それも火に焼かれてしまう。火に焼かれるというのは地獄のイメージですから、死体を茶毘にふすなどということはとんでもないわけです。

もし、9月11日の世界貿易センタービルなどへの同時自爆テロの実行犯がムスリムであったなら、その死は、自殺を禁じ劫火に焼かれることを最も忌み嫌うムスリムにとっては二重三重に忌むべき事を重ねてしまっていることとなります。パレスティナにおける自爆テロでも同様で、それほどに絶望的な行為であるのだといえます。

## 「五行」 何を実践すればムスリムなのか？

そして最後に、**天命**です。あらゆる善悪の決定は最終的にはアッラーによって下されます。しかし、人間はそれに従うばかりで自由意志はないのかというところでもありません。他方で預言者ムハンマドは、人間は自らの行為に責任があると言っているからです。悩ましいところです。

その悩ましさは何によってはっきりさせなければならないのかといえば、やはりこの「六信」に基づく「行」、つまり日々の信仰の実践行為なのです。

「信じるものは救われる」という具合に受身だけ

では済まないところが、ムスリムであることの特徴です。ムスリムの義務とされる五つの行為があるからです。それは、**信仰告白**、**礼拝**、**断食**、**巡礼**、**喜捨**の五つです。六信とこの五行という信仰と行為とが一体となってムスリムなのです。

**信仰告白**は「アッラーのほかに神はなく、ムハンマドは神の使徒である」というコトバを証言することで、**シャハーダ**といえます。この信仰告白によって、唯一神への信仰とムハンマドが神の使徒であることが確信されて、ムスリムになるのです。

戦闘をとともうジハードで戦死する際に行う信仰告白の意味も広義には含んでいて、そうした戦闘でたおれたムスリムは**シャヒード**（殉教者）と呼ばれます。ジハードとはもともと奮闘努力することを意味しています。自己の信仰とムスリム共同体（ウンマ）のために研究に精励することなども、実はジハードです。

**礼拝**（サラート）にはいろいろな所作がありますが、ムスリムにとってはアッラーと直接向き合う純粋に個人的な時間です。一般的には、預言者であり使徒であるムハンマドが行っていた礼拝に倣って行われています（スンニーの本来の意味）、多少それとは作法の異なるグループもあります。金曜日には集団礼拝が行われますが、礼拝そのものはあくまで個人的な行為です。

**断食**（サウム）も一見すると個人的な行為なのですが、実は、兄弟であるムスリムがこの地上でさまざまな苛酷な状況に置かれていることに想いをはせるという共同体的行為でもあります。そのためこれを行うラマダーン月は、自己の信仰に揺るぎなきように努めて（ジハードの本来の意味）平和的に過ごすことが奨励されます。また、断食には意志（ニーヤ）が必要で、多忙で日中の飲食がとれないような場合は断食したことにはなりません。

**巡礼**（ハッジ）は、一生のうち一回は定められた時期に決められた方法でメッカに旅して儀礼を果たすという共同体的行為で、あのマルコムXもこのハッジ体験で黒人至上主義を克服することになりました。任意の時期に巡礼することは小巡礼（ウムラ）と呼ばれ、区別されています。

**喜捨**は共同体の中における富の再配分を考慮した行為です。ですから、喜捨を受ける貧しい人々もそれを為した富者に感謝するというより、あくまでアッラーに感謝するのがふつうです。富者は富者で、

まるで天国行きのための貯蓄や贖罪行為をしているかのようなつもりで喜捨をしているのだとも言われることがあります。

ムスリムの五行は、純粋に個人的な行為とムスリム共同体（ウンマ）との関わりでの行為とが一体となっている行であるといえます。すると、イスラームを信仰するということは単に個人の信仰の問題に留まらなくなるのが道理です。だからこそイスラームのコトバで政治社会の変革が語られるということも可能になるわけです。信仰の教義体系と信徒の生活実践規範とが一体なものとして機能しているイスラームに、近代西欧キリスト教世界に生じたいわゆる政教分離は、原理的にも適用しえないわけです。

## 文明は衝突しない

### 21世紀の世界秩序認識とイスラーム復興現象の行方

「西欧キリスト教文明とイスラーム文明との衝突」—この「文明の衝突」論は、サミュエル・ハンティントンというアメリカの政治学者が、ソ連崩壊後の世界イメージを描いたものですが、それは湾岸戦争直後の世界のムードを表現したものでした。当時は、アメリカはイランや中央アジアなどのイスラーム世界の国々と中国や北朝鮮の核兵器技術とが結びつくことを非常に警戒していました。ハンティントンが夢想したような、イスラーム文明と儒教文明とが結託して西洋キリスト教文明と全面対決するという構図（かつての「大東亜共栄圏構想」にも似たような発想がありました）は、ソ連亡き後の「新たな敵」を探していたアメリカにとっては格好の世界図式であったのです。

もっとも、イスラーム復興現象や世界各地の「原理主義」（ユダヤ教、キリスト教、ヒンズー教、仏教など）の表出により、そうした宗教を基盤にした諸文明の対立という言説が流通しやすい国際環境があったことは確かです。

しかし、そうした宗教的対立抗争の多くは、宗教それ自体から発したものというより、東西冷戦期には抑圧されていたナショナリズムやエスノナショナリズムの動きによって、既存の政治秩序を組替えようとするものでした。こうした動きを、ナショナリズムの基本原則からすれば語義矛盾ともいえる、**宗教的ナショナリズム**と呼ぶ場合もあります。

20世紀の後半から中東では10年に一度大きな戦争があるということになっています。湾岸戦争から

10年経って今度はアフガンというわけです。ここがアメリカのターゲットになることは、カスピ海油田の利権問題などもあって、ある程度予測されていたという人々もいます。

ただ今回は、ブッシュ大統領の「十字軍」発言が大慌てで修正されるといったことに見られるように、「文明の衝突」を前面には出さないことになっています。あくまで、テロとの「新たな戦争」だというわけです。逆に、イスラーム原理主義過激派の人々の方が、かえってこの「文明の衝突」を強調するといった現象が起こっています。

テレビニュースの映像などを見ていると、何かが衝突しているといった方が分かりやすいので、そういった対決イメージに陥りやすいのですが、実はイスラーム原理主義過激派と呼ばれているような人々自身、グローバリゼーションの席捲する最中のこの10年間に欧米メディアが垂れ流していた「文明の衝突」論から大いに影響を受けてしまった人々なのだとはいえます。ウサーマ・ビン・ラーディーンがそうであるように、イスラーム原理主義過激派もまたそのテロ行為自体も、イスラームの文脈から出てきたというより、実はアメリカ自身の作り出したもの、つまりblow backした現象（本来秘密情報部員が外国で流したデマの本国への逆流を意味し、転じてアメリカの国民に秘密にされている政策が意図せぬ結果をもたらすこと）であるといえるからです。

イスラームという普遍的な教えの中からはけっして「文明の衝突」論は出てきません。イスラームの教えの根本原理は、先述のようにアッラーは唯一であるというタウヒードと呼ばれるものですが、そこからは善と悪とが同じレベルで対立したりするわけがないのです。つまり、タウヒードとは、アッラーの唯一性と現世において一つとして同じものないさまざまな存在の多様性とを、一の中の多と多の中の一という同時的認識の下にとらえることであり、そういったイスラーム的発想からすれば、現在いくつかに分かれているかのように見える世界諸文明も、それぞれの多様性を保ちながらいずれは一のものになっていくと考えられるのです。私は、このタウヒードの世界観に依拠しつつ、「文明とは、コミュニケーション密度の高度化された政治社会の状態である」という定義を与えています。コミュニケーション密度が高度化しているならば、衝突は起こりえないでしょう。

対決や紛争の原因を文明の名の下に隠蔽すべきではありません。他者に単純な二者択一を迫ったり、証拠も示さないで逮捕拘束したり、他国に一方的通告で大量破壊攻撃をするなどといった状態は、そもそもその政治社会が文明とは呼べない状況に陥っていると考えざるをえないでしょう。

信仰に強制があってはならないというのはイスラームの基本原理です。イスラームに帰依しているムスリムのごくあたりまえの発想からすれば、いずれこの世のすべての人々がイスラームに帰依することになる。それこそはアッラーの御業である、ということになります。

「文明は衝突しない」というたしかかな理性的判断をもって、私たちの日常性を脅かすテロの術中に嵌らないと同時に、政治権力の恐慌状態から来る全体主義化状況に陥らないよう、自覚的なシヴィル・ソサエティ（この考え方は近代西欧の独占物ではありません）の構築に奮闘努力することは、イスラーム世界にも欧米世界にもともに求められています。

#### 【参考文献】

- \* 鈴木規夫『日本人にとってイスラームとは何か』ちくま新書1998年
- \* ウンベルト・エーコ「世界最終戦争」翻訳（『週刊現代』11/24号掲載）

#### 【さらに興味をおもちの方々にお勧め文献】

日本語で比較的入手しやすいものを挙げておきます。

#### 【辞書類】

日本イスラーム協会編『イスラーム事典』平凡社1982年

\* 現在では

<http://www.ioc.u-tokyo.ac.jp/~islam2/search.shtml>  
にアクセスするとWeb検索も可能。

黒田壽郎編『イスラーム辞典』東京堂出版1983年

\* 内容的にはBrill社のイスラーム百科辞典から多くを採用されているが、系統的によく編集されていて「読む辞典」になっている。

板垣雄三編『新・中東ハンドブック』講談社1992年

板垣雄三（共編）『事典 イスラームの都市性』亜紀書房1992年

三浦徹他編『講座イスラーム世界 別巻イスラーム研究ハンドブック』栄光教育文化研究所1995年

\* イスラーム研究について分野別、地域別、時代別に分離し、それぞれについて研究動向を示したうえで主要な参考文献が提示されている。

〔基本書類の日本語版〕

井筒俊彦訳『コーラン』（上・中・下）岩波文庫1957-58年

日本ムスリム協会訳『日亜対訳注解聖クルアーン』日本ムスリム協会発行1982年

＊この二つのクルアーン日本語版の他にも大川周明訳のものなどいくつかの版がある。その評価は立場によりさまさま。

ブハーリー著（牧野信也訳）『ハディースーイスラーム伝承集成』中央公論1993-94年（文庫版2001年）

〔概説書・イスラーム関連専門書類〕

ハミードゥラー（黒田美代子訳）『イスラーム概説』イスラミックセンター・ジャパン1983年

＊もともとフランスへのムスリム移民第二、第三世代のためにパリ・モスクから発行されたものの日本語版。その英訳版も相当数普及している。同センターで購入可能。

<http://islamcenter.or.jp/jpn/listgoodssold.htm>

『文藝別冊 だれでもわかるイスラーム 入門編』河出書房新社2001年

大川周明『回教概説』中公文庫1991年

＊1930-40年代の日本におけるイスラーム研究の総合的成果の一つ。欧米文献の活用には、内容構成は実によくまとまっており、現在でも概説として十分に通用する。

井筒俊彦『イスラーム哲学の原像』岩波新書1980年

井筒俊彦『イスラーム思想史』中公文庫1991年

＊井筒氏は、戦前大川周明が大量に買い込んだイスラーム関連文献を自由に活用して研究できる環境にあった。戦後はイスラーム学の世界権威となったが、日本国内では晩年の一時期を除いて不遇であった。

板垣雄三・佐藤次高（編）『概説イスラーム史』有斐閣1986年

板垣雄三『歴史の現在と地域学—現代中東への視角—』岩波書店1992年

臼杵陽『原理主義』岩波書店1999年

鈴木規夫『日本人にとってイスラームとは何か』ちくま新書1998年

〔専門書翻訳書類〕

J.L.アブー＝ルゴド（佐藤他訳）『ヨーロッパ覇権以前』岩波書店2001年

カレン・アームストロング（塩尻他訳）『聖戦の歴史』柏書房2001年

ファーティマ・メルニーシー（私市他訳）『イスラームと民主主義』平凡社2000年

チャルマーズ・ジョンソン（鈴木主悦訳）『アメリカ帝国への報復』集英社2000年

ファン・ゴイティソーロ（山道佳子訳）『嵐の中のアルジェリア』みすず書房1999年

ファン・ゴイティソーロ（山道佳子訳）『パレスチナ日記』みすず書房1997年

ファン・ゴイティソーロ（山道佳子訳）『サラエヴォ・ノート』みすず書房1994年

アリー・シャリーアティー（桜井秀子訳）『イスラーム再構築の思想』大村書店1997年

E.W.サイド（島弘之訳）『パレスチナとは何か』岩波書店1995年

E.W.サイド（今沢紀子訳）『オリエンタリズム』（上・下）平凡社ライブラリー1993年

F.ペンスラマ（西谷修訳）『物騒なフィクション—起源の分有をめぐって—』筑摩書房1994年

**基礎事項の確認から  
受験のための実力養成まで**

整理と演習	世界史Bゼミノート	B5/216p.	820円
徹底整理	詳解日本史Bノート	B5/208p.	820円
徹底整理	詳解政治・経済ノート	B5/176p.	820円

**必須事項をコンパクトに  
まとめた短ゼミシリーズ！**

10日あればいい  
2003大学入試短期集中ゼミ

5月発行予定

世界史B	A5/88p.	（予価）	525円
世界史 近・現代史	A5/64p.	（予価）	483円
世界史B 記述・論述	A5/88p.	（予価）	578円
日本史B	A5/88p.	（予価）	525円
日本史 近・現代史	A5/64p.	（予価）	483円
日本史B テーマ史	A5/64p.	（予価）	483円
日本史B 重要史料	A5/64p.	（予価）	483円

定価はすべて5%税込です